

# 質的調査データの二次分析

## ——大正期「月島調査」と労働運動

武田 尚子  
(早稲田大学教授)

質的データの二次分析には、おもに6つの方法があるといわれている。第一はオリジナル調査データを歴史的一次史料として用いる方法、第二は比較研究の素材として活用する方法、第三はオリジナル調査の時期には登場していなかった新しい概念や視点で、調査データを再解釈する方法、第四はオリジナル調査の設計・調査方法の再評価、第五はオリジナル調査の分析内容の妥当性の検証、第六はオリジナル調査データを教材として活用する方法である。本稿はオリジナル・データとして、1918～20年に東京市で実施された内務省衛生局の「月島調査」に着目し、上記の第四「オリジナル調査の設計・調査方法の再評価」を行った。先行研究では「月島調査」の調査コンテキスト理解するにあたって、月島の労働事情・労働運動に対する理解が不足していることから、あらためて月島調査と労働運動の関わりを掘り下げる必要がある。内務省嘱託で労働調査を担当した調査員・山名義鶴に焦点をあてることによって、関連資料の掘り起こしを行ったところ、「月島調査」の調査地変更の理由など、新たな知見を得ることができ、オリジナル調査の設計について考察を深めることができた。

### 目次

- I 質的調査データの二次分析
- II 大正期「月島調査」再考

### I 質的調査データの二次分析

#### 1 国内・国外の概況

近年、日本の社会学分野では、20世紀に社会学研究者・研究集団が蓄積してきた調査資料やデータをどのように保存・活用するかについての議論が活発に行われるようになってきている(たとえば2013年日本社会学会大会シンポジウム「リサーチ・ヘリテージ——20世紀の調査遺産をいかに継承するのか」)。調査遺産には、最終成果物である刊行本や調査報告書だけでなく、調査の過程で収集・

活用された諸資料、多様なドキュメント(映像記録をふくむ)、フィールドノートなどもふくまれる。これらの調査遺産は、該当の研究者・研究集団の調査方法を再検討し、公表された最終成果物の意義を評価する重要な参考資料になると同時に、先人たちが調査にかけた苦闘のあとにふれることによって、現役の研究者が自らの調査方法や技術、モチベーションを高める貴重な手がかりになる。これまで「先行研究の検討」は最終成果物について行われてきたが、調査遺産が活用できる場合には、調査方法までふくめて先行研究の意義が再考されることが望ましい。

調査遺産を活用するためには、一次データがストックされたデータアーカイブがあることが理想的で、そのような点からも調査データの二次分析をどのように進めるかという課題は、アーカイブ

方法・アーカイブ学までふくむ総合的な研究領域でもある。調査遺産には量的調査データ、質的調査データの両方がふくまれる。日本では量的データ二次分析については、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター(SSJDA)などが稼働しはじめて久しく、多様な二次分析の成果が産出されていることは周知の通りである。

一方、質的調査データの場合は、量的データに比べて、より多様な形態のドキュメントをふくむことから、データの整理・管理に膨大な作業を必要とする。そのため、日本国内では質的調査のデータアーカイブの設置や、質的データ二次分析は、量的データ二次分析ほど進んでいないのが現状である。

質的調査データ二次分析の可能性を展望するうえで、参考になるのがイギリスで、質的データ二次分析に関して先進的な取り組みが行われている。国立機関の中に、質的データの「収蔵・公開・二次の利用・二次分析」を促進する専門部局のESDS-Qualidataが設置されている。ESDS-QualidataはESDS(Economic and Social Data Service)の専門プロジェクト実行部局(ユニット)の1つで、質的データの情報を収集し、収蔵に値するデータ・セットを取捨選択し、公開にいたる諸手続きを管理している。ESDSの上部機関はUK Data Archive(UKDA)で、UKDAは社会科学・人文科学分野の量的・質的データの収蔵・公開・利用普及を専門とする国立機関である。

ESDS-Qualidata(以下、ESDSは省略)の設立に尽力したのは、オーラル・ヒストリー研究の第一人者で、エセックス大学にいたポール・トンプソンである。1994年にESRC(社会経済研究機構、Economic and Social Research Council)のプロジェクトとしてQualidataの活動が始まった。質的データ二次分析の研究環境の構築が積極的に進められてきた背景には、イギリスにおけるワーキング・クラス研究、オーラル・ヒストリー研究の貴重なデータの蓄積が散逸してしまうことへの懸念があった。

Qualidataのデータアーカイブとしての魅力の1つは、イギリス社会学の精華ともいえる「クラ

シック・スタディーズ」(1950-80年代の著名な調査データ・セット)のオリジナル・データが保存されていることである。ピーター・タウンゼンド等による貧困研究(*The Family Life of Old People, The Last Refuge, Poverty in the United Kingdom*), ジョン・ゴールドソープ等による労働者研究(*The Affluent Worker*), レイ・パウル等による都市・労働研究(*Three Hertfordshire Village Survey, Isle of Sheppy Studies*)など、Qualidataを通して、著名なデータ・セットを活用することができる。

## 2 二次の利用・二次分析の「可能性」と「制約性」

質的データの二次利用・二次分析には、おもに6つの方法があるといわれている(Corti and Thompson 2007)。第一はオリジナル調査データを歴史的一次史料として用いる方法、第二は比較研究の素材として活用する方法、第三はオリジナル調査の時期には登場していなかった新しい概念や視点で、調査データを再解釈する方法、第四はオリジナル調査の設計・調査方法の再評価、第五はオリジナル調査の分析内容の妥当性の検証、第六はオリジナル調査データを教材として活用する方法である。

「既存のデータを利用すること」の利点と制約条件について、Qualidataは次のように紹介している(“*The Last Refuge, ESDS Qualidata Research Methods Teaching Resource: Reusing Qualitative Research*”)。利点は、「質の高い優れたデータ・セットを利用できること」「調査のバックグラウンドとなる資料・情報の収集が済んでいること」「オリジナル調査データの追加・補足調査が可能であること」「比較研究の素材になること(歴史的、時間的、テーマ的)」「リサーチ・デザインや調査方法について示唆を得られること」などである。

制約条件としては、「オリジナル調査の調査コンテキストを二次分析にそのまま活用できるわけではないこと」「オリジナル調査のインタビュー・データなどが生成される際の間主観的要素が不明であること」「オリジナル調査データと二次分析のリサーチ・クエスチョンの調整が必要になること」などである。

制約条件に挙げられている諸点は、「調査コン

テキスト」に関連する課題とまとめることができる。オリジナル・データを有効に活用するには、当初の調査コンテキストを十分に理解し、オリジナル・データの意義・強みを把握することが必要である。そのためには調査プロセスの追体験が欠かせない。追体験を深めるには豊富な関連資料群が必要で、多様性に富んでいることが望ましい。

以上のようなイギリスにおける二次分析についての知見をふまえ、本稿ではオリジナル・データとして、1918～20年に東京市で実施された内務省衛生局の「月島調査」に着目し、上記の第四「オリジナル調査の設計・調査方法の再評価」を行う。「月島調査」の調査コンテキストについて理解が深まる関連資料を探り、「月島調査」の意義について再考する。

## II 大正期「月島調査」再考

### 1 「月島調査」の調査体制

「月島調査」は、東京市京橋区月島を調査対象地とし、1918年11月から1920年秋にかけて実施された、日本で最初の総合的かつ組織的な都市社会調査である。調査の統括・指導にあたったのは、高野岩三郎（1918年東京帝国大学法科大学教授、1919年東京帝国大学経済学部教授、1920年大原社会問題研究所所長）である。高野は労働運動に対する関心が深く、労働者の地位向上を求める際に、確実なデータに基づいて運動を進めることを説いた。データを作成する1つの方法として、精密な家計調査を提案し、1916年に友愛会の協力を得て、「東京に於ける二十職工家計調査」を実施した。

高野は1916年から内務省保健衛生調査会の委員だったが、米騒動が起きた直後の1918年10月22日に所属する第七部会で、家計調査をふくむ「都市衛生状態実地調査案」の議案を提出し、認められた。このときの議案に記された調査の目的は、「多数の熟練職工家族の団聚する地域を選び、其の住居状態、家計状態、小児の健康状態、既往に於ける生産・死産及び疾病状態等」の調査で、調査地は「本所区柳橋横川町」が予定されてい

た。その後、11月12日の委員会で、調査地の変更が提案され、改めて「京橋区月島」が調査地となった。

調査体制は次のようであった。統括責任者は内務省保健衛生調査会委員として高野岩三郎、調査実務の担当者は内務省囑託に任命された権田保之助、山名義鶴、星野鉄男の3名である。その他、数名が臨時に実務の補助作業に当たった。調査を実施するために、月島東仲通9丁目3番地の借家に調査事務所をかまえた。

調査は1918（大正7）年11月に始まり、1920（大正9）年夏まで実査が続いた。実査の内容は次の14種類である。月島の社会地図作成の実地調査、児童身体検査、労働者の身体検査、労働者家族栄養調査、長屋調査、衛生関係の職業の調査、小学校衛生調査、工場労働調査、労働者家計調査、小学校児童の家族関係・娯楽等の調査、飲食店調査、寄席の実地調査、露店調査及通行人調査、写真撮影である。このほか、報告書には、既存統計資料の分析内容も記述されており、1913～16年の東京市人口動態統計小票に基づき、月島の生産・死産、婚姻、離婚動態が明らかにされている。このように工場労働者の労働実態や、家族の生活実態を明らかにする実地調査のほか、統計処理、社会地図作成、写真撮影が行われ、多様で斬新な方法が試みられた。

調査結果は、1921年5月に内務省衛生局から『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告 第一輯』が刊行された。三冊構成で、第一冊には報告本文、月島及付近地図1枚、月島の写真11枚が掲載されている。「第一編 総説」は高野、「第二編 月島と其の労働者生活」は権田、「第三編 月島に於ける労働者の衛生状態」は星野、「第四編 月島の労働事情」は山名が執筆した。第二冊『附録一』には統計表106種合計194表、統計49種50表、第三冊『附録二』には月島社会地図27図、写真90枚が掲載されている。

調査終了時に、高野が大原社会問題研究所所長であったことから、調査データの一部は法政大学大原社会問題研究所に保存されている。

## 2 本稿の課題

「月島調査」の意義については、先行研究が多様な角度から論じている（関谷 1970；川合 1981；2004；佐藤 1996）。都市を対象にした先駆的な地域調査という評価はほぼ定まっている。しかし、なお不明の感をぬぐえないのが、1916年に高野が実施した「東京に於ける二十職工家計調査」との関連である。関谷耕一は「月島調査」が多様な調査内容をふくむことから、単に二十職工家計調査の規模を拡大し、分析を精緻にすることが主眼目ではなかったと述べているが（関谷 1970：9）、この説明では「二十職工家計調査」と「月島調査」との関連は不明のままである。さらに、関谷の「月島調査」解説で疑問なのは、高野は「二十職工家計調査」は労働組合を通じて行ったが、「月島調査」にはそのような記述はないことから、「月島調査には労働組合の積極的参与を求めなかった」と記していることである（関谷 1970：32-33）。この部分に限らず、関谷の「月島調査」と労働組合・労働運動の解説は理解しにくい部分が多く、核心をついていない感はまぬがれない。

先行研究のこのような状況を鑑みると、「東京に於ける二十職工家計調査」とのコンテキストを理解するのは結構難しい作業であるらしく、到底本稿の字数でおさまるものではない。そこで本稿では、二十職工家計調査との調査コンテキストを理解する準備に当たる作業を行っておきたい。職工家計調査との関連がわかりにくいのは、先行研究が依拠した「月島調査」関連資料が不十分であったことによると推察されるので、本稿ではより多様な関連資料の活用を試みる。

日本で最初の総合的かつ組織的な都市社会調査と後年評されるようになったが、調査実施中は、高野や調査員にとって手探りであったことは想像に難くない。調査内容が「総合的」「多様」だった点が評価されているが、手順が定まった調査方法が確立されていた時代の話ではないので、当初から調査設計が固まっていたと考えるよりは、「多様さ」を生み出した背景をさまざまな角度から探ってみるのが良いと思われる。高野が10月22日に第七部会に提出した調査案に記されてい

た調査項目は、要するに「住宅、家計、小児の健康、出生・死亡・疾病状態」である。11～12月に月島の関連諸機関に調査の趣旨を説明し、協力を依頼して、調査対象者の選定や募集が行われた。つまり、調査項目の大枠を維持しつつ、現場の状況や、調査員と協力者の相互作用によって実査が進められていった。このような調査進行過程では、調査にたずさわった人物たちの個性やバックグラウンドに負うところも少なくなかったと推察される。

調査の実施状況については、補助作業に当たった三好豊太郎の回想が1980年に公表されている（三好 1980）。先行研究もこれに依拠して調査コンテキストを理解しているところが少なくない。しかし、三好は学校に通いながら、権田保之助の社会地図作成の補助をしていたに過ぎず、調査体制の全体像を理解できる立場にあったわけではない。「月島調査」に関わる以前、三好の関心は生物学、地質学にあって、地質調査の経験を生かして、社会地図作成に関わることに興味をもっていたことを述べている（三好 1980）。つまり、三好は理系的志向・関心がつよい人物で、社会問題や労働問題に対する経験は浅かったと推察される。そのため、三好の回想には、月島における労働問題・労働運動に関する記述はほとんどない。そのような特徴をもつ資料に依拠してきたため、先行研究の調査コンテキスト理解は、月島の労働事情・労働運動には及んでいない。つまり、関連資料の多様性が不足しているのである。

調査体制に関しても、先行研究の分析は、内務省嘱託として実査に当たった3人の調査員のうち、民衆娯楽研究者に成長した権田保之助と、医学者の星野鉄男については掘り下げているが（川合 1982；寺出 1982a, 1982b；吉見 1987；草野 1990）、労働事情の執筆を担当した山名義鶴についてまとまった研究は見当たらない。権田は後年に著作集を刊行するほど執筆量が多かったこともあって、後学の研究者にとって追跡しやすい人物であるが、山名は著作量が少ないこともあって、後学の研究者の関心をひきつける契機が少なかったのだろう。

以上をまとめると、先行研究における調査コン

テキストの理解には、月島の労働事情・労働運動に対する理解が不足している。これは「多数の熟練職工家族の団聚する地域」を選び、職工家族の生活を調べあげることに調査目的があったことを考えると意外に感じられるが、調査関連資料として労働事情に疎い関係者の記述に先行研究が依拠したため、そのような偏差が生じたと推測される。

以上のような点を念頭におくと、高野の「東京に於ける二十職工家計調査」は友愛会の協力を得て、可能になった調査であることから、あらためて「月島調査」と労働運動の関わりを掘り下げる必要があることに思い至る。内務省嘱託だった3名の調査員のうち、労働調査を担当したのは山名義鶴である。本稿では、山名に焦点をあて、「月島調査」への参加の経緯、調査期間中の山名の活動を明らかにする。

このことは10月22日の第七部会で承認された調査地変更と関連する。調査地の変更については、高野自身が『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告 第一輯』第一冊「第一編 総説」で、「本所横川町内の区画は其の後本所大平警察署の戸口調査に依れば熟練職工家族の住居者割合が少数であることを確かめた。之は同地が市内有数の細民窟たる大平町に近接したる所から熟練職工よりも寧ろ多く其の以外の労働者を包容して居ることは決して怪しむに足らぬのであるが、他方同地よりも京橋区月島の方が遙かに良く自分共の目的に合する土地として考ふるやうになつた」と記している(高野1921)。この記述は明確に変更理由を述べているように思われるので、先行研究では、これ以上変更理由を掘り下げてはいない。しかし、ここで留意しておきたいのは、これはあくまで高野の立場から述べた変更理由である。山名に焦点をあてることによって、別の視点から「多数の熟練職工家族の団聚する地域」として、月島のほうが適当と考えられた理由があったことが明らかになる。

### 3 山名義鶴と月島調査

山名義鶴は1891(明治24)年生まれで、生家は応仁の乱の山名宗全の直系で、貴族院議員の男爵家であった。京都府立第五中学校、第三高等学

校を経て、1917年に東京帝国大学独法科を卒業し、その翌年に内務省嘱託として「月島調査」に参加するようになった。三高での同級生に柵橋小虎がいて、演説の練習や共同生活によって切磋琢磨する結社の仲間だった。その仲間の1人に麻生久がいた。彼らはともに1913(大正2)年に東京帝国大学に進学し、1916(大正5)年2月、3人で東京帝国大学法科大学教授の吉野作造を訪ね、友愛会の話聞いた(柵橋1999:72)。これ以降、柵橋は吉野との関係をつよめ、労働運動への関心を深めて友愛会員になった。いったん他へ就職したものの辞職して、1918年9月に友愛会に入職し、関東出張所主事として労働運動に専念することになった。柵橋小虎は友愛会への入会・入職に当たって、終始吉野作造の助言を仰いでいた。ちょうどその頃に、高野岩三郎が調査員を探して、帝大の同僚である吉野に適当な人物の推薦を依頼した。そのようないきさつで、最初は吉野から柵橋に、調査員になることへの打診があった。柵橋はいったん引き受けた。しかし、柵橋は友愛会に入職して労働運動に専念しはじめた直後のことだったので、調査の実務を十全に果たすのは難しいと予想されたことから、仲間の山名に調査員就任への打診がまわっていったのである。

この間の経緯については、「柵橋小虎日記」が現存しており(法政大学大原社会問題研究所所蔵)、1918年10～11月に次のように記されている(適宜、武田が句読点を補った)。

十月十一日 吉野博士より、麻生を通じて、余に面会を求められるに由り訪問す。用件は内務省保健調査会が職工の生活状態を調査する為め、市内職工町に人を定住せしめんとす。余に行かざるかとの相談なり。明日、高野岩三郎博士に面会を約して辞去、直ちに麻生を訪ねて、相談の上、受諾に決す。余は労働者を理解する事を以て、労働運動の成否の第一要件とす、友愛会に入りたるも之が目的の爲めにして、すなはち友愛会そのものの發達に直接の目的を置くものにあらず。然るに今、突如、此問題起る。余の爲に絶好の機会なり。且、友愛会と此調査と仕事は関係あり。並行し得べきものなるは勿論なれども、○○が果たして此二つの仕事を完全に成立し得るや否やを疑問とす。

十月十二日 法科大学統計学教室に高野博士を訪ねて、懇談す。来週中に決定する事となる。友愛会へ帰り、野坂（参三）、松岡（駒吉）は、若し此仕事をする事になれば、それは友愛会の方を閉却せざるを得ざる結果となる故、不可なりと云ふ。十月十四日 朝、麻生を訪ひ、高野博士よりの交渉に受諾の決心を打明け、共に野坂を訪ひ了承を得。

十月十七日 高野岩三郎博士を訪ひたれども不在。柳島移○の件につき、談合を遂げん為めなり。柳島横川町を見聞に行く。大小工場の間挟まれたる職工町（貧民窟とあまり区別なし）にして、予想外の不潔さに聊か驚きたれども、辟易はせず。BOOTHが初めてEAST LONDONを見た時の記事などを思ひ起す。

十月十八日 保健調査会囑託の件につき報告の爲め、吉野博士を訪問。二三日中に決定すべしと高野岩三郎氏より話されたる由。

このように、労働者の生活を理解するには絶好の機会と考えた棚橋は、友愛会の専任の仕事と両立するかどうかの懸念はあったが、この機会を手放すことは惜しまれ、まず自分で内務省囑託の調査員を引き受けたのである。この間に柳橋横川町を視察し、自分の目的を果たすには不相当との印象を持ち、高野と相談しようとしたが、この時点では高野との間でその件の相談は始まっていない。10月22日に、高野は保健衛生調査会に調査案を提出し、認められた。

十月二十三日 出勤、朝、高野博士より実施確実の旨、連絡あり。午後より平沢君と共に工場視察。日本○○—三菱○○—月島日本機械株式会社。築地にてそばを食ひ、平沢氏○○、労働運動につき大いに語る。労働運動の成否は一に人なり。有力なる人物をドンドン運動に惹き入れる事が肝要なり。山名を呼んで、保健調査会の事業を引き受けて貰ひ、而して吾等が遠大の労働運動の準備と為さん。山名は引き受けるだろうと思うが、果して如何なるや。

棚橋の構想では、職工町への住み込み調査は、あくまで労働運動を展開させるための一過程で、上位に掲げている目標は、労働運動の発展である。10月23日の記述で注目したいのは、棚橋を月島

に案内したのは、友人の平沢計七であったことである。平沢は友愛会本部員で8月まで関東出張所の業務を担当しており、月島の友愛会の活動状況に詳しくあった。棚橋は友愛会会長の鈴木文治の紹介で平沢と知り合ったのである（後述）。

十月二十四日 晩、麻生方のロシヤ語会、岡上、思ひ掛けず山名、及○、麻生、快談。十時過ぎ辞す。山名に僕の意中を打ち明け、今度提携して労働運動を為さんと云ふ。山名曰く、京都に於て考へ、○○に於て君を助けん為を想ひて上京すと。明朝、確答を付す。

十月二十五日 九時半頃、山名来り、承諾の旨を答ふ。よりて、共に吉野博士を訪ふも留守。直ちに高野博士を訪ひて、山名を責任者とし、余は援助する事とし度しと述べ、博士も承諾せられたり。尚、本所は保健調査の目的には恰好の場所なるは明らかanelども、吾等の労働運動の策源地とする為めには不相当なり。依りて、之を月島にせんと提議せしも、之は直ちに容れられず。共に友愛会に帰り、山名程なく去る。

この日をもって、内務省囑託として調査員の任につくのは山名義鶴に決まった。このいきさつから分かるとおり、山名の調査員就任そのものが、友愛会の内部事情と連動しており、棚橋の労働運動展開構想の一部なのである。山名の調査員としての行動は、友愛会専任者の棚橋と二人三脚という視点で「月島調査」を理解するのが適当であろう。

#### 4 調査地の変更と労働運動の拠点形成

棚橋は友愛会内部では改革派と目されていた。友愛会内部を刷新し、かつ外部に労働運動を展開させる拠点を築くため、棚橋、山名両名は月島を最適地と考え、調査地の変更を高野につよく働きかけたのである。

十月二十六日 山名、月島を踏査せんと来訪。平沢君と丁度、来合せる京橋支部餅田君と四人、月島の職工町を踏査し、夕景、京橋第一支部長酒井勇氏方に置いて（後略）。

十月二十八日 調査所を月島に置くべく、高野博士を説伏する為め、山名と共に自宅を訪ひしも不在。

十月三十日 山名、今日は高野博士を月島に招ひて踏査の結果、大体に於て月島と決定せりと。快哉。老人達、第一歩に於て譲れり。

このように調査地変更の直接的契機は、棚橋、山名など若い労働運動家による拠点形成を目的とした高野への働きかけである。この日、高野は調査地の変更を決心した。このことを棚橋は、高野が「譲った」と記している。つまり、若い実行部隊の月島に対する強いモチベーションが優先されたことと棚橋が理解したことを示す。

むろん、調査地の変更は保健衛生調査会の調査目的に齟齬をきたすものではなかった。しかし、10月25日の棚橋の記述によれば、保健衛生調査会の調査目的は本所区柳島横川町でも果たすことは可能だったのである。調査地変更の原動力は棚橋たちの労働運動拠点形成願望にあり、それを受け入れた高野は、公的には統計的根拠を用いて変更理由を説明したといえよう。ちなみに、調査開始後、若い調査員たちは自分たちの間で「高野老人」と敬愛の念をこめて言い慣わしていた。

十一月二日 山名来訪、悉、月島に決定、一兩日中に移転すと。(中略)月島を十分に開拓することが出来たら、それは素晴らしい事である。此島の職工等に僕等の理想をソックリ注入する事が出来たら、他の何処へも僕等は行かずに、日本を根底から革新する事が出来る。月島へ移る。そして職工にプロパガンダする。此のプロパガンダの徹底しきへすれば、それで万事は旨く行くのだ。此島に向ひて精力を集中すべきである。

このような経過を経て、11月6日に東仲通9丁目3番地の調査事務所に山名が引越し、住み込んで調査に当たることになった。同時にここが労働運動の拠点にもなった。たとえば早速、11月6日には月島の友愛会幹部を招いて、集会が開かれた。

十一月十六日 夕方、松岡、菊地と山名方へ行く。平沢、麻生は既にあり。今晚は表面は或は友愛会幹部会といひ、或は保健調査の趣旨を了解して貰う為の招待会といふと雖も、其目的とする所は、吾等と職工との接近を計り、将来の新労働運動を生む結婚式たるにあり、即ち労働階級の知識階級に対する偏見を打破して、直ちに彼等の心を握ら

んとするにある。幹部にして集まる者十五名、僕と山名の紹介あり。酒出づ。快談、高論、時の移るを覚えず。十一時に閉会。

調査事務所を拠点にして、友愛会幹部を集めた労働運動と、保健衛生調査への協力依頼が同時に行われた。山名と棚橋にとって、保健衛生調査は月島の労働者をオルグする機会でもあった。友愛会幹部を集めて、高野による正式の調査依頼の会合も開かれた。

十一月二十六日 夕方 月島へ行く。高野、権田、山名氏と夕食を共にす。支部幹部約二十名、来会。高野博士より保健調査の話あり。尚、支部の事務に対する意見を交換し、十一時頃散会す。

この後も棚橋は連日のように調査事務所へ行き、友愛会員と運動方針を協議している。

以上のように高野自ら月島の友愛会幹部に協力依頼しており、関谷の「月島調査には労働組合の積極的参与を求めなかった」という記述(関谷1970:32-33)は不適當といえる。

高野は『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告 第一輯』第一冊「第一編 総説」で、月島で行った諸調査のなかでも、労働者家計調査は「自分共の頗る意を用ゐたる所」で、1918年10月末までに家計簿記入の協力者として72世帯を確保し、そのうち58世帯は「労働者有志の斡旋」で得たと述べている(高野1921:53-54)。

「棚橋小虎日記」に基づいて棚橋・山名の行動をたどっていくと、労働者については友愛会のネットワークを活用して、月島を調査地として開拓していったことは明らかで、その他の有力ネットワークがあったというわけではない。故に、高野が家計簿記入の協力者を得た「労働者有志の斡旋」ルートの「有志」とは友愛会員と考えるのが妥当であろう。

## 5 月島の友愛会活動

月島ではこの年(1918年)7月1日に友愛会月島支部が新設されたばかりであった。支部の所在地は、「月島東仲通九丁目五番地 酒井常五郎」方である(1918年8月『労働及産業』84号:42)。これは調査事務所と2番地しか離れていない。ごく近隣である。第一次大戦中の戦時ブームで活況

を呈していた月島で空き家を探すのは難しかったというから、おそらく調査事務所の家屋も友愛会幹部の協力を得て、探し得たのではないだろうか。

月島支部で興味深い動きは、8月1日に共済組合が発足し、8月15日に消費組合が設立されたことである。7～8月にかけて、月島では労働者の活発な動きが展開されていた。共済組合設立の動きは米騒動の前から始まっていたとはいえ、月島での一連の動きは米騒動で庶民が要求の声をあげた時期に重なる。月島のなかでも労働者の自発的な動きが顕在化していたちょうどそのときに、棚橋・山名の誘導によって調査事務所が設置され、ここを拠点に知識人層出身の運動家たちが労働者層との連携をはかったといえよう。

京橋区にはもともと友愛会京橋支部があった。8月18日に友愛会月島支部の左海幹事長宅に、友愛会本部から平沢計七、京橋支部から支部長の酒井勇が来て、協議の結果、月島支部は京橋第二部として活動することになった(1918年10月『労働及産業』86号:39)。活発化する月島の労働者を友愛会の傘下におさめて、先鋭化をコントロールする本部の意向があったと推察される。8月に始まった共済組合、消費組合の活動は存続し、京橋第二部の事業として引き継がれた。たとえば、共済組合では9月の台風で床上浸水の被害にあった会員に見舞金を出している。9月に友愛会第二支部の会員は123名に達した(1918年11月『労働及産業』87号:44)。このような月島の友愛会活動のなかで、保健衛生調査への協力依頼がなされたのである。

労働者世帯の協力者を一定数確保することができたので、1918年12月から「労働者家計調査」の家計簿記入が始まった。山名は記入の指導でも忙しく、権田保之助と手分けして、まず「労働者宅を訪問して家計簿たる金銭出入控帳を交付し其の記入に就き心得置くべきことを注意して記入を依頼し、其の後も数々巡視して記入の仕方を検し記入に就ての助言を与へ」た(高野1921:53)。

調査と併行して、労働運動は次のように展開していった。友愛会では京橋に2つの支部があったが、12月28日に両支部の幹部が協議し、2つの支部を統合させて、翌年1月10日に「京橋連合会」

を正式に発足させることになった。14名の理事のなかに、棚橋、山名も加わっている。実働部隊の委員は棚橋、山名、餅田守一の3名である。この陣容をみると、単に2つの支部が統合されただけでなく、知識人層と労働者層の統合もはかられたことがわかる。棚橋・山名は委員として中核を占め、労働者出身の餅田と協力して運動を牽引する体制が12月末に確立された。

餅田は調査事務所に近い月島東仲通10丁目1番地に居住地を移した。その2階が空いていたので、「連合会クラブ」として開放し、会員の集会所にした(1919年3月『労働及産業』91号:47)。1月16日、その2階に間借人として、棚橋が移転してきた。さらに調査事務所の向かいの家がもと月島支部左海幹事長所有の空き家だったことから、帝大同級生・満鉄調査室勤務の運動家・佐野学がそこに移転してきた(棚橋1999:120-123)。

このようにして東仲通9丁目の調査事務所の周辺に、知識人層から労働者層にいたるまで活動家が集積する環境が形成された。「麻生君や新人会の人たちも盛んにやって来るようになった。かくして、この事務所(武田注:調査事務所)は山名君がここに居住し労働者等との連絡に当たっているので自然に労働運動のための集会や連絡等にも利用され、月島方面へ組合組織や労働者教育の上に非常に効果を挙げ、月島は関係方面の最も開明された新しい労働運動の基地となった」(棚橋1978:23)。

## 6 月島購買組合と山名義鶴

このように体制を整えて、次に山名義鶴が労働運動として着手したのが「月島購買組合」の設立である。1919年2月10日の友愛会京橋連合会の理事会で、山名は購買組合定款の草案を説明し、「購買組合創立委員会」委員9名が選出された。2月14日の委員会で設設計画案が説明され、3月5日の連合会理事会に設立申請が議案として提議された(1919年4月『労働及産業』92号:38)。3月24日に月島購買組合として東京府から設立認可を受け、「連合会クラブ」の所在地東仲通10丁目1番地に事務所を設置、4月1日から事業を開始した(法政大学大原社会問題研究所所蔵資料「有限

責任月島購買組合定款」「大正九年調査消費組合調査資料 月島購買組合」「消費組合調査資料大正十一年 月島購買組合」。

設立趣旨について、「大正八年度事業報告」に「従来労働者の消費組合として会社、工場の経営若くは助成になるものは我邦にも其例に乏しくあるまいが、労働者の独立経営せるものに就ては未だ之を聞かぬ。蓋し消費組合の経営が労働者にとり極めて困難事であり、過去に於て屢々失敗の経験が繰り返されて居ることは吾々も知って居るが、時勢の進歩と労働階級の自覚とは今日之を同様に論ずべからず、今や將に此難事業を解決す可き時であると信ずるのである。(中略)規模なほ云ふに足らず、成績の見るべきもの未だなしと雖、吾等は却て之を以て組合運動の根底たる共営自治の精神を涵養し普及せしむる所以ではないかと思うものである」と記されている。

月島購買組合について本稿では概要を記すにとどめることとするが、要は組合員から一口5円の出資金を集めて、生活に必要な物品を共同購入し、組合員に安く頒布する消費組合運動である。取扱品は味噌、醤油、薪炭、砂糖、酒・麦酒・飲料水、石鹼、草履、荒物、足袋、メリヤス、乾物、化粧品、紙類である。1919年末の組合員は159名、そのうち152名は工場労働者であった。理事長は山名義鶴で、他に14名の理事がいた。販売方法は掛け売りで、商品は配達した。最初の4カ月間は専任の事務職はおらず、組合員が工場通勤の合間に事務を分担した。8月に芝にも出張所を開いて拠点が2カ所になり事務量が増えたので、餅田が専任者となって事務処理をさばくようになった。他の組合員は工場勤務などの本務のかたわら運営に関わった。山名も荷車をひいて、配達・販売に携わったという(大島1968:108)。

このように月島購買組合の中核は、設立計画者であり、組合理事長の山名である。消費組合活動に取り組んだ動機は「大正八年度事業報告」に記されていたように、「共営自治の精神」を涵養することが労働組合運動発展の根本であるという認識を持っていたからである。組合沿革を記した書類には「本組合ハ友愛会員ノ発起ニカカル、我国消費組合運動ノ先駆者ヲ以テ任ズ」と記されている

(法政大学大原社会問題研究所蔵資料「大正九年調査消費組合調査資料 月島購買組合」)。生協運動史においても、労働者生協の先駆として記念すべき組合と評価されている(奥谷1973:151)。

月島購買組合の組合員数は、1919年159名、1920年220名、1921年219名と順調に増加・維持されたが、1922年にいたって74名に激減した。その理由については1921年に石川島造船所、月島機械製作所に争議が起こって、失敗して、組合員が離散したからという説がある(奥谷1973:151)。山名は「月島調査」終了後は、高野が所長を務めていた大原社会問題研究所に移り、関西に転居した。

以上のように、「月島調査」の実査期間である1918年11月から1920年夏まで、山名は調査事務所を拠点に労働運動に忙しい日々を送り、とくに1919年4月からは月島購買組合の責任者として繁忙をきわめた。1921年5月に刊行された『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告 第一輯』で、山名の担当による「第四編 月島の労働事情」は、他編に比べて意外の感がするほど分量が少ない。少ない文字数の背景に、山名の多忙な活動があったことを読みとるべきであろう。「月島調査」の補助作業に従事した三好の回想には、このように活発だった棚橋・山名の活動や、その周辺の人々のことについて、自分自身の目で直接みた光景としては全く叙述されないのである。三好の回想は「月島調査」のごく一部の限定された面しか叙述していないことは明白であろう。

## 7 むすび——消費組合運動と月島調査

本稿は、山名が「月島調査」に参加することになった背景に、棚橋・麻生・山名を中核とする知識人層運動家グループの労働運動の拠点形成、労働運動の推進という目的があったことを明らかにした。また、調査と並行して行われた労働運動は、月島購買組合という消費組合運動面での成果を出したことを述べた。

これらの活動を進めることによって、調査グループは月島において労働者と緊密なネットワークを形成した。月島の労働者家計調査等はこのような社会関係をふまえて現出した成果、データで

ある。山名が最終報告書に執筆した原稿量は多いものではなかったが、「月島調査」の調査環境の形成に山名の尽力があったことを低く評価してはならない。

調査報告書とは異なる形態であるが、消費組合運動の先駆と評される「月島購買組合」も「月島調査」の成果の1つとしてとらえるべきではないだろうか。この成果は多様な観点から評価されるべき可能性を秘めている。

友愛会は1915年に消費者組合規定草案を発表したが、事業としてはみるべきものがないまま過ぎていたところ、友愛会の生協方針をはじめて具現化し得たのが「月島購買組合」だといわれる(奥谷1973:148-149)。月島でなぜ具現化が可能だったのかを問うとき、「月島調査」の意義について、これまでとは全く違う視点で考察を深めていけるように思う。

山名義鶴は後年、労働者教育に傾注していったが、労働者に接しながら、身近な問題から意識を高めていくことを導くなかで、労働者の生活費、家計調査、賃金問題に言及している。生活費や家計などミクロレベルの数字を根拠として、目標を導き出す姿勢は「月島調査」で高野と接する過程で養われてきたものであろう。後年の山名の活動に着目することによって、労働者教育の内容という点から、「月島調査」の意義を再検討する道が開けてくる。

また、高野は1914年に消費組合論を展開している(高野1914)。労働運動や労働者に対する共感をベースに、友愛会との関係を維持しつつ、消費組合論のような理論的関心と、家計調査のようなミクロレベルの調査方法論への関心という両面の展開が、「東京に於ける二十職工家計調査」にも「月島調査」にも反映されている。労働者の生協運動という点でいうならば、高野岩三郎の兄である高野房太郎は、その最も源流の一人である。

「月島調査」の調査設計・調査方法の読み直しは、調査の意義について多様な角度から見直す契機になり、高野房太郎から高野岩三郎、そして月島調査に関わった調査員やその周辺の人々が、労働者の生活、家計、賃金をめぐって、どのような方法や思想的営為をつむいでいったのかを問うこ

とにつながっている。

#### 参考文献

- Corti, L. and Thompson, P. (2007) "Secondary Analysis of Archived Data."
- Gubrium J. F., Silverman D., eds., *Qualitative Research Practice*, London: SAGE.
- ESDS Qualidata, "The Last Refuge," *ESDS Qualidata Research Methods Teaching Resource: Reusing Qualitative Research*.
- Heaton, J. (2004) *Reworking Qualitative Data*, London: Sage.
- 宇野弘蔵 (1970)『資本論五十年(上)』法政大学出版局, pp.158-175.
- 大島清 (1968)『高野岩三郎伝』岩波書店.
- 奥谷松治 (1973)『改訂増補 日本生活協同組合史』民衆社.
- 川合隆男 (1981)「『月島調査』再考察(1)(2・完)——わが国近代都市労働者生活の形成と『月島調査』」『法学研究』54(8), pp.1439-1464, 54(9), pp.1571-1603.
- (1982)「愛児のために何を為すか 星野鉄男」『近代日本の生活研究』光生館, pp.127-149.
- (2004)「社会踏査を試みた月島調査——近代日本における社会調査方法の模索と月島調査」『月島調査再考察——わが国近代都市労働者生活の形成と月島調査』『月島調査について』『近代日本における社会調査の軌跡』恒星社厚生園, pp.97-129, 131-197, 395-418.
- 京橋月島新聞社編 (1940)『月島発展史』京橋月島新聞社.
- 草野滋之 (1990)「わが国における労働者文化論に関する一考察——大正期における権田保之助の所論を中心として」和光大学『人文学部紀要』25, pp.195-202.
- 佐藤健二 (1992)『都市社会学の社会史——方法分析からの問題提起』『都市社会学のフロンティア1 構造・空間・方法』日本評論社, pp.151-215.
- (1996)「方法を読む——社会調査の水脈をたどりながら」『都市の解読力』勁草書房, pp.209-254.
- 霜野寿亮・佐藤茂子・田中重好・有末賢 (1981)「『月島調査』の周辺とその後」『法学研究』54(8), pp.1484-1528.
- 関谷耕一 (1970)「解説 高野岩三郎と月島調査」『生活古典叢書第6巻 月島調査』光生館, pp.1-44.
- 高野岩三郎 (1914)「本邦ニ於ケル消費組合」『国家学会雑誌』28(6, 7, 8).
- (1921)「第一編 総説」内務省衛生局『東京市京橋区月島に於ける実地調査 報告第一輯』(『生活古典叢書第6巻 月島調査』(1970)光生館).
- 編 (1933)『本邦社会統計論』改造社.
- 武田尚子 (2009)『質的調査データの2次分析——イギリスの格差拡大プロセスの分析視角』ハーベスト社.
- (2009)『もんじゅの社会史』青弓社.
- 武田文祥 (1982)「囚われたる民衆と社会科学 高野岩三郎」『近代日本の生活研究』光生館, pp.44-62.
- 棚橋小虎 (1978)「山名君の思い出」山名義鶴の記録刊行会『山名義鶴の記録』, pp.14-24.
- (1999)『小虎が駆ける』毎日新聞社.
- 棚橋小虎追悼集刊行会 (1974)『追想 棚橋小虎』棚橋小虎追悼集刊行会.
- 寺出浩司 (1982a)「労働者文化論の形成と変容」『近代日本の生活研究』光生館, pp.178-199.
- (1982b)「月島調査報告書第二輯『労働者及教員家計調査報告』——権田保之助手稿についての一検討」『三田学会

雑誌』75 (6), pp.94-108.

内務省衛生局 (1921) 『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告第一輯』(1970 『生活古典叢書第6巻 月島調査』光生館に再録—『第一輯』第一冊のみ).

内務省保健衛生調査会 (1919) 『大正八年四月 保健衛生調査会第三回報告書』.

二村一夫 (2008) 『労働は神聖なり, 結合は勢力なり——高野房太郎とその時代』岩波書店.

三好豊太郎 (1980) 「月島調査の成立とその経過について」『明星大学研究紀要人文学部』 pp.16 : 31-48.

山名義鶴 (1923) 『一九二二年の世界』大阪機械労働組合出版部.

—— (1927) 『労働読本』高橋至誠堂.

山名義鶴の記録刊行会 (1978) 『山名義鶴の記録』非売品.

吉見俊哉 (1987) 「盛り場と民衆娯楽——権田保之助」『都市のドラマトウルギー』弘文堂, pp.36-59.

ただ・なおこ 早稲田大学人間科学学術院教授。最近の主な著作に『20世紀イギリスの都市労働者と生活——ロウンリーの貧困研究と調査の軌跡』(ミネルヴァ書房, 2014年)。専門領域は社会学(都市社会学, 地域社会学, 質的調査方法)。